電気新聞　2013年(平成25年) 8月19日(月曜日)

田中　均

たなか・ひとし＝69年京大法卒。外務省アジア大洋州局長、外務審議官を経て現在、（株）日本総研国際戦略研究所理事長、（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー、東大大学院客員教授。

ウエーブ　時評

2013. 8. 19

創造的な個人の養成

グローバルな人材育成の必要性が叫ばれて久しい。少子高齢化で日本のマーケットが大きく成長していくことは最早想定されず、世界の成長マーケットで競争していくためには、グローバルに物事を考え、各国の人材と競争していけるような能力と見識を持った人材が必要である。しかし、日本で教育を受け、日本の社会で育つと、個人として競い合うよりも集団として行動することを優先する。個人が抜きんでるよりも集団として成績を上げることが好まれる社会である。東京大学公共政策大学院の私のゼミでも日本人の学生は常に他の日本人を意識し、常識的に振舞おうとしているように見受けられる。物事に黒白つけず曖昧さを残すのも、勝者、敗者を明らかにすることが全体としての和を乱すからだと説明されることもある。他方、このような日本社会並びに日本人の特性が平均的に質の高い労働力を生み、戦後の日本の奇跡的な復興を生んだ原動力であったのも事実だろう。

尤も、日本社会が常に集団行動の論理で動いてきたわけではない。先日、講演で鹿児島県を訪れ、偶々同県出身の歴史家の先生と懇談する機会があり明治維新前後の歴史に話が弾んだが、明治維新を実現したのは、いわゆる黒船に象徴される外圧はあったにしても、薩摩や長州出身者を中心とする創造的な発想力と豊かな行動力を持った個人であった。西郷隆盛や大久保利通、木戸孝允といった人々は、各々動機は異なっても、先見性を持った使命感で動いたと言える。しかし、その後の日本において突出した個人が事をなした例が多いとも考えられない。大きく時代を変えるような変化のときには、例外的に個人が役割を果たしたと考えるべきなのかもしれない。日本を戦争の悲劇に導いたのも特定個人というより、積み重ねられた時代の雰囲気であり、排他的なナショナリズムにかられた集団的狂気なのだと思う。日本は島国であり、長い鎖国の歴史の中で他の文化と切磋琢磨することが殆どなかった故に集団的な和を貴び、集団的な雰囲気に流されることの方が多かった、ということなのであろうか。

集団的な秩序を守っていくことに慣れた日本社会で今日、グローバルな競争に勝ち抜けるような創造的な力を持つ抜きんでた個人を養成していくには大きな困難が伴う。そのような人材を養成していくためには、まず、突出した人材を受け入れる社会の寛容さこそが何よりも重要となる。日本の社会には平均点の高い画一的な人材を求めるあまり、往々にして集団から離れ突出しようという人材を阻害していく傾向がある。個人の突出に対する嫉妬があるのかもしれない。教育にも更なる競争を刺激する仕組みを取り入れていく必要があるし、異なる文化圏と刺激をしあい能力を磨くという意味で、外国への留学や外国人留学生の受け入れも意識的に増やしていかなければなるまい。そして企業は社内研修を飛躍的に充実させていくことが必要である。

一方で、何としても避けたいのは、長きにまかれ右といえば右に行ってしまうような集団的雰囲気に流されていく社会である。戦前にナショナリズムが燃え盛り、政府の意図的な宣伝もあり、ほとんどのメディアが政府の行動を礼賛していったことが過ちを生んだのを忘れてはならない。今日もそのような傾向がないわけではない。例えば、中国はけしからん、といった度々ネット上で見られる短絡的議論に世論の支持があると考えてしまう雰囲気である。本来、日中関係の重要性に鑑み、どうすれば健全な関係を構築できるのか、といった冷静な議論が必要であるし、このためにはメディアを含む知的コミュニティーが明確な問題意識を持って役割を果たさなければならない。